

## 《 討 議 I 》

(進行—浅田員由)

それでは、ただいまから討論に移させていただきます。司会は、助言者を代表しまして、榎崎先生をお願いいたします。先生、よろしく申し上げます。

(司会—榎崎彰一)

それではただ今から質議ならびに総括に入らせていただきたいと思います。予定いたしております時間が非常に短いものですから、あまり充実した質議討論を展開していただくというわけにはまいらないと思います。本当はもう1日時間をとりまして、じっくりと展示物や破片などを御覧いただいた後に、十分な時間をとって質議応答をやるべきであったかと思えますけれども、いろんな事情がございましてわずか2日間という短い時間の中で、しかも北から南まで全日本にわたって平安時代の土器・陶器の一括報告もしていただくというたいへんよくばった企画を立てましたために問題が非常に多岐にわたっております。そういった点でいろいろ質議応答なり討論していただくというにはあまりにも短い時間でもあるし、また問題点の提出も非常に少のうございます。というのはいろんな各地域のそれぞれの様相というものをいっぺんに持出したために早急に皆さん方の頭の中でいろいろ今御整理をなさっておられる段階だと考えております。そこで時間もございませんので素早く先ほどお出しいただきました質問につきまして若干時間をとって発表者の方に対する質問をすませた後、昨日私が会場で問題点として提示いたしました分業の問題、あるいは年代の問題、あるいはやきものの範疇の問題、そういった点をどこまでお話し合いいただけるかわかりませんが、できるだけ活発な御討議をお願いしたいと存じております。質問をお出しいただいたのがわずか5通でございまして非常に少ないので驚いているような次第です。質問の大半が私と斎藤君の方に集中しておりまして、それは後回しにいたしまして、先に他の発表者の方に対する御質問の方から始めさせていただきますと思います。

最初は桜井先生の方からお出しいただきました御質問ですが、白鳥さんに対しまして東北地方の様相、これのC・D・E・F群の編年、これをどのように評価されますかという御質問でございます。これをどのように評価されるかということの意味内容が年代に関する問題なのか、あるいはセット関係とか、そういった他の器物に関する問題なのか、その点どちらになるのでしょうか。(桜井清彦)

これは実は年代の問題で、これは白鳥さんに対する質問というのではなくて、榎崎先生がどうお考えになるかということであって、これは後ほど今先生がおっしゃった榎崎さんと斎藤さんに対する質問の中で1つ感想をいただければありがたいと思います。

(司会)

ああそうですか。それでは寺島さんに対しまして吉田恵二さんからの御質問で、京都産緑釉陶の変遷過程と実年代をお知らせ願いますというのが1つと、平安京の資料選集に発表されておる一連の陰刻花文を持つ椀の産地はどこと考えられるかというのは、これは斎藤君にも合せての質問であります。

(寺島孝一)

現在まで先ほども申しましたが現存まで確実に京都あるいは京都周辺で発見されてる窯というのは、そう多くはないわけですが、その中で私が実見したのは大阪の紫金山を除きまして本山遺跡、あるいは幡枝関係、石作・小塩・豊岡周辺のものというふうに聞いております。

その中で一応先ほど申しましたけれども前山 2・3 号窯を10世紀の中頃、一応平安京初期として平安京の出土例から考えておいていいんじゃないか。その前に石作を置こうというふうに現在は考えております。したがって石作をどこまで上げるかということはちょっとまだ検討中でございますけれども10世紀前半位というふうに一応考えております。尻につきましては黒岩あるいは小塩遺跡のものがくるわけでしょうけれども、それを例えば昨日発表になった吉岡先生の場合は石川県で11世紀前半というふうにご考慮されておられるわけですが、まあ11世紀前半、あるいはもうちょっと早くしまいくるか、まあ一応現在私が見た範囲はそのように考えております。平安京資料選で9世紀初頭と、あるいは9世紀中葉と考慮されておられる緑釉陶器の生産地は私は現在わかりません。

(司会)

吉田さんよろしゅうございますか。

(吉田恵二)

結構でございます。どうもありがとうございました。

(司会)

それから同じく吉田さんから、後はだいたい私と斎藤君に対する質問でございます。

桜井先生の方からお出しいただきました質問の中で、この図録の猿投窯掲載の編年表は若干の修正が必要であるというふうに昨日私が申し上げたわけですが、どの程度修正変更があったのかという御質問でございます。これにつきましては昨日私が申し上げました、斎藤君の発表いたしました8世紀の編年に対する修正案が第1点であります。これは高蔵寺2号窯・NN32号窯との間に岩崎25号窯という新しい窯式を設定しようということでありまして、これはちょうど平城のⅢにあたる天平年間ということになります。この新しい窯式として設定せざるを得ないという判断に至りました理由は、昨日斎藤君が御報告いたしましたように高蔵寺2号窯と鳴海32号窯との間に連続性が希薄であまりにも断絶が大きいということで従来考えていたわけではありますけれども、しかるべき窯式設定にふさわしい窯が見つかっていないという関係から今までは留保してきたわけでありまして。しかし、この夏新しくそういった窯が発掘されて細部の器種の変化について、あるいは組合せについて新しく窯式設定が可能であるという判断に至りました。これは猿投窯の中でも一番この東山に近い部分。したがって西寄りの西北に近い地域でありますけれども、そこに新しく発見された窯であります。これと同じ窯はまだ鳴海地区にもあるということが名古屋市の調査で言われておりますし、同じくこの夏に尾北窯、つまり愛知県の北部ですが、この春日井市でもやはりそのような窯が全面発掘ではありませんが、物原の調査が一部分なされて同時期のものが確認されているというようなことで、これは尾張全体にわたって新しい窯式設定として可能になるんじゃないかというように推定をしております。それからもう1点の新しい修正と申しますのは今まで編年表の中では最末期に置いておりました折戸53号窯、この後にNN 82・百代寺という2つの窯式設定を追加したわけでありまして。この問題はいろんな年代論・窯式論・編年論そういった問題全てに関連し合っております猿投窯の変遷の中では重要な問題になりますので、他の質問等をかみ合せて後ほど私なり斎藤君の方からお答え申し上げたいというふうに思っております。

それから吉田恵二さんから斎藤君に対しまして展示資料・北丘14号窯の中に火禱のものがあるが、類例はほかにあるのかと、これをどう考えるかという御質問であります。

齋藤君の方から。

(齋藤孝正)

北丘14号で確認されました火襷のものに関しましては私の知る限りでは発見例が初めてであります。その火襷のもつ評価に関しましてはあれが普遍的な重ね焼きの焼成方法として東海地方で認められるのかどうかと私はとったんですけれども、一応あのような重ね焼きの焼成方法は普遍的なものではないと今のところ考えております。

(司会)

よろしゅうございますか。

(吉田)

従来ですね、北丘の場合にはあれは二度焼きだろうと今考えられるんですね。火襷の上にある程度かかっておりますので。ですから二度焼きというのが北丘だけの特殊なやり方なのかどうかということですね。実際問題非常に……。

(齋藤)

あの火襷といいますのは北丘14号の灰釉の碗に関する火襷の問題ですか。

(吉田)

はい。

(齋藤)

それは吉田さんは灰釉が二度焼きでかけられているというお考えになるわけですか。

(吉田)

そうですね。

(齋藤)

一応そのような灰釉陶器に関して北丘14号のたぶん大形の碗だと思いますけれども、あのような痕跡が確認できましたのはあれが初めての発見例だと私は思っておりまして、今のところあれが灰釉陶器の焼成方法に関しまして普遍的、あるいは一定の技術として確立した焼成方法であるというような感じは今のところいざいざありません。

(吉田)

どうもありがとうございました。

(司会)

あとは私どもに対する質問でございますけれども、この京都市埋蔵文化財研究所の百瀬さんからNN82号窯式の段階で灰釉陶器碗が再び深い碗形になり、かつ輪花も黒笹90号窯にみられるように長くしっかりしたものになるのはどのような原因によるものかという御質問。この点は。

(齋藤)

今回設定いたしましたNN82号窯から新たに深い碗のタイプおよび口縁部を折り返した折縁皿とっている皿のタイプおよび黒笹90号窯式にみられました受部を有しますのとは別タイプの非常に小形になりまして、上面に受部を有しない托と認定してる三器種がこの段階から新たに出てくるわけですが、今のところ確実にその祖形といったものは確認しておりません。ただ1つの見通しといたしまして、はっきりいたしませんけれども何らかの密教法具との関係がありましてそのようなタイプのものが出現してくるのではないかというような考えを今のところはいただいておりますが、はっきりしたことは今のところわかっておりません。

あのもう一点の質問の趣旨というのはちょっとよくわからないんですけども、もう少し具体的におっしゃっていただけませんか。

(百瀬正恒)

(聞きとり不明)

(斎藤)

輪花手法の変遷につきましてはいわゆる(黒笹)90号窯式のタイプといわれている輪花手法といましようか、御指摘のように外面をへらで押しまして内面に隆起のたらない分は粘土帯を貼り付けまして隆起を補うというのが一番正当な輪花手法でありまして、その輪花手法が次第にすたれてはいくんですけども外面をへらで押すという、あるいは(黒笹)90号で見られますような沈線状の輪花手法といいますのは今回設定いたしましたNN82号窯式の段階までは、細々と次第に量的には減ってまいりますけど一部並行しながらその段階までは残存すると今のところ考えております。それと並行する形で次第にへらを使わないで指で押すだけの輪花手法というのが増えてくるわけでありまして、百代寺で見られますような輪花手法が、これがとどえて復活したというふうに考えるよりもむしろその流れの中で、この段階までであるというふうに考えていただいた方がいいと思います。

(司会)

その点はですね、その輪花手法は途絶えたのではなくして、ずっと継続しております。輪花の出現、これは中国の五代様式の写しでありますけれども、これがはっきりした中国のようにその胴部まで全部変化をつけたああいって輪花様式を持つものは日本ではまだ写しておりませんで、もっぱら口縁部を折り返す形において輪花を模倣するという五輪花の手法がでてまいりますけれども、これは90号(黒笹90号窯)の段階からであります。90号の段階におきましては破片なり展示物の中に明確に見られますようにある種の丸い棒か何か特殊な器物でもって、非常に強い折り返しによって明確な輪花を施すというものが最初の段階でありまして、それからややわずかに外へ押すというふうな希薄になる段階があり、最後にはそれを指ナデによりまして外側からずっとこう外面をすり上げることによって五輪花の終末を示すようなそういう段階のもの、これはもう山茶碗、つまり白瓷系陶器の範疇に入ってしまうわけでありまして、12世紀の中頃位いまでずっと続くわけでありまして、そういうふうに輪花手法というものは断絶はありませんで、ずっと継続して段々と希薄になりながら続いているというのが輪花の変遷であります。

ほかの問題ではよろしゅうございますか。

(百瀬)

それに平安京でも緑釉陶器の器形で……。

(司会)

いえ、先ほどお出しいただいた質問状の中で関連する問題です。

ほかの質問はちょっと後へまわしたいと思います。

(百瀬)

関連する内容ですが、越州窯の碗といわれるのは、タイプは通常西寺なんかで出るような円板・蛇ノ目高台で、ずっと口縁部まで、それからもう1つ輪高台で外反する口縁部を押さえるもの、そういう2つのタイプがあることがわかっておりますが、緑釉陶器においても10世紀のある段階で滋賀県の緑釉みたいに非常に深いタイプの碗なんかが出現して、ああいってタイプの碗は、ちょ

つと篠とか小塩などにはないのでこれと関連するのではないかなと思います。

NN82窯式にみられるものや、滋賀県の緑釉もへうで押して深いし、線彫りのある……………  
(不明)……………。

(司会)

私どもはその緑釉陶器というのは青磁の写しというふうに考えておりました、灰釉陶器とよんでるものはどちらかという白磁とか青磁を含みますけれども、緑釉陶器の方は日本では高火度焼成のきれいな青磁が焼けないという点でもっばら青磁を模倣したというふうに考えております。その点でNN82(NN82号窯)から出てくる新しい深いタイプの碗というものと、今御指摘の深い近江系の緑釉の碗というものは口縁部の反りの状態・形態において違っております。近江のものはややわずかにシャープな口唇部を持ちながら外反する形態をとるのが多いと思いますけれども、NN82の場合にはまっすぐ立ち上がりまして丸作りの口縁を持つという点と、それから高台が高いといっても近江の場合には内側に二段構成の高台を持つものが特徴的でありますけれども、こちらの場合にはもっと高い高台を持っており、そういう点が近江系のものとは同じ深い碗といっても形態的には全く違ったものだというふうに考えております。

ほかの方の御質問にお答えする前に新しく提案いたしましたO-53(折戸53号窯)以降の新しい窯式設定に関連いたしまして、これはあくまでこちらの窯跡の調査に基づいて新しく提案したわけでありまして、そういう窯式は実際に需要地においてはたして成立し得るかどうかというこの問題がやはり検討されなければならないわけでありまして、それなしに成立は不可能でありますけれどもその点に関連いたしまして今日の午後におくばり致しました、これは滋賀県の兼康さんがわざわざ最近の新しい資料を持ってきてくださったわけで、その問題とも関連します重要な資料であるかと思っておりますので兼康さんの方から1つこの資料について御説明いただければありがたいと思っております。